

東京の文化財



(上)市公会館 (下)日比谷公会堂

目次

東京都指定文化財の新指定	1~3
世界で最も美しい橋 清洲橋	4~5
文化財を活かす(練馬区・武蔵村山市)	6~7
「風流踊」ユネスコ無形文化遺産に登録決定	8

「風流踊」ユネスコ無形文化遺産に登録決定

令和4年11月30日、盆踊りや念仏踊りなどの民俗芸能「風流踊(ふりゅうおどり)」が、ユネスコの無形文化遺産に登録されることが決定しました。東京都からは、いずれも国の重要無形民俗文化財である3つの民俗芸能が含まれています。

小河内の鹿島踊(奥多摩町)

鹿島踊は、旧東京都西多摩郡小河内村に伝承された踊です。かつては旧暦6月15日の祇園祭りに演じられたことから「祇園踊」とも呼ばれ、岫沢・日指集落の加茂神社、南集落の御霊神社の祭りに奉納されていました。

伝承については諸説あり、どのように伝わったものかは明らかになっていません。ダム建設で集落の大部分が水没したため一度は途絶えたものの、移転した人々の熱意によって保存会が立上げられ、再び伝承されることとなりました。

鹿島踊の舞には11の演目があり、踊の所作と唄から江戸初期以前の女歌舞伎、鹿島踊、念仏踊りの系流があるとされ、古い歌舞伎の遺風を伝えるものです。女装の男子6名(三番叟の上演には烏帽子狩衣の男子が加わる)と、囃子方として笛2人、太鼓2人で行います。(保護団体名:小河内の鹿島踊保存会)



新島の大踊(新島村)

新島村本村と若郷に伝わる盆踊で、本村では盆祭祝儀踊、若郷では供養踊とも呼ばれます。本村では8月15日夕から長栄寺境内で、若郷では8月14日の晩に妙蓮寺境内で、輪になって踊ります。

踊り手は男性で、「カバ」と呼ぶ布を周囲に垂らした笠を被り、紋服の着流しに角帯を締め、その上に細い真田紐を結びます。「カバ」の色は本村は紫、若郷は赤です。頭から背中に色鮮やかな下げ緒を長く垂らし、履物は履かずに白足袋はだし、腰に印籠を下げます。印籠は踊りの場に入る際の証で、必ず身に付けます。

演目は、本村が「役所入り踊」「お福踊」「伊勢踊」の3つ、若郷が「役所入り踊」「備前踊」「青が丸」「伊勢踊」の4つで、恋愛を主題にした内容が多いです。「役所入り踊(役所入り踊)」で始まり、最後は必ず「伊勢踊」で終わります。(保護団体名:新島大踊保存会、若郷大踊保存会)



下平井の鳳凰の舞(日の出町)

鳳凰の舞は、東京都西多摩郡日の出町下平井地域に伝承される民俗芸能です。雨乞いや悪疫退散の舞として、毎年9月29日に近い土日に行われる地元の春日神社での祭礼の際に演じられ、「奴(やつこ)の舞」と「鳳凰の舞」の二庭で構成されます。

「奴の舞」は、奴の姿に扮した小学生らの子供達によって演じられます。頭に鉢巻、足には白足袋と草履をつけ、扇子と木刀を持って舞われ、所作や台詞まわしには歌舞伎の影響がみられます。

「鳳凰の舞」は、大太鼓を中心に三重の円を描くように位置した踊り手が、大太鼓を打ちつつ勇壮活発にその周囲を踊るものです。鳳凰を冠した踊り手の扮装や踊り方は全国的にも珍しく、他に類を見ない特色を持っています。(保護団体名:鳳凰の舞保存会)



編集後記 今号では、新たに東京都の指定になった文化財を紹介しています。東京の文化的豊かさを示す、いずれも貴重な文化財です。これからも大切に守り続けていきましょう。



東京都指定文化財の新指定

東京都指定有形文化財(建造物)	しせいいかん ひびやこうかいどう 市公会館及び日比谷公会堂 1棟
所在地	千代田区日比谷公園1番3号
所有者	公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所(市公会館) 東京都(建設局)(日比谷公会堂)
構造形式及び大きさ	鉄骨鉄筋コンクリート造、タイル張り、地下1階、地上6階建、塔屋4階建 指定建築面積 3,346.14平方メートル

市公会館及び日比谷公会堂は、日比谷公園の南東隅に位置する、事務所棟と公会堂からなる複合建築で、昭和4(1929)年に竣工しました。設計者は、早稲田大学の建築学科の祖として知られる佐藤功一(1878-1941)です。

建物は、事務所棟である市公会館部分と大講堂を持つ公会堂部分が丁字形に配置されています。市公会館は、日比谷公園南側の道路と平行に一字に配置されていて、中央には時計台があり、その真下が中央玄関になっています。公会堂は、市公会館に対し直角に、公園に突き出るように建てられていて、公園側に開かれた入口の2階にはバルコニーが設けられています。

周囲の景観との調和を意識して、外観の大部分は茶褐色の縦筋模様が入ったタイル貼りで、壁面には垂線を基調とした柱形が連結したデザインになっています。

佐藤功一設計の「市政会館」と「日比谷公会堂」の異なる機能と空間を、複合的な建物として一体的な立面により実現させた、きわめて完成度の高い建造物です。また、鉄骨鉄筋コンクリート造の初期の建物であり、本格的な音響設計が試みられた公会堂として、建築技術史上にも意義の高いものです。

戦前から、日比谷公園と一体となって、変化し続ける都市の記憶と景観を継承し続ける重要なランドマークでもあり、東京ならではの地域的特色が顕著な建物です。

東京都指定 有形文化財 (建造物)	ないとうけじゅうたく 内藤家住宅
	6棟 主屋、書院、蔵、書院の蔵、 表門、庭門、土地付
所在地	府中市美好町三丁目20番地の1の一部
所有者	個人
構造形式 及び大きさ	主屋：木造2階建、複合屋根（入母屋造・切妻造）、 銅板葺、建築面積367.51平方メートル 書院：木造平屋建、寄棟造、銅板葺、建築面積 125.04平方メートル 蔵：木造2階建、切妻造、トタン葺、建築面 積30.14平方メートル 書院の蔵：木造2階建、切妻造、トタン葺、 建築面積26.40平方メートル 表門：木造一間冠木門、間口3.31メートル、 両袖堀付 庭門：木造一間棟門、切妻造銅板葺、 間口1.84メートル、控柱付 土地面積：2,373.05平方メートル



内藤家は、江戸時代後期に甲州街道府中宿の西に位置する本宿村の名主を務め、明治時代には西府村の初代村長を務めた上層農家で、本件は内藤家代々の屋敷です。

主屋は江戸時代後期の建設と推定され、格式高い式台・玄関を備えた構えで、都内でも最大規模の平面を持つ2階建ての建物です。別棟となる書院を備える民家は稀で、表門から見える主屋の北側に設置された式台・玄関から書院へ客を迎え入れる独自の配置がみられます。

建物は全体的に保存状態が良好で、一部に後世の改変はあるものの、主要部材が残っており復元可能な状況です。敷地には、屋敷構えを構成する内、主屋、書院、蔵等の主要建物群が一体的かつ良好に保存されています。

旧甲州街道、府中宿周辺の往時の様子を伝える唯一現存する建物であり、江戸時代後期以降に家勢を増し、村の主導的役割を果たした江戸近郊農家のあり様を示す建物として、歴史的にも貴重な文化財です。

東京都指定 有形文化財 (絵画)	しほんもくはんしやくしよくゆうずうねんぶつえんぎ 紙本木版着色融通念仏縁起
	2巻
所在地	港区西麻布四丁目11番7号 繁成寺
所有者	繁成寺（港区西麻布四丁目11番7号）
構造形式 及び大きさ	卷子装 上巻：縦34.8センチメートル× 横1,948.8センチメートル 下巻：縦34.8センチメートル× 横2,087.5センチメートル

融通念仏縁起絵巻は、融通念仏宗の開祖良忍の伝記と、念仏の靈験を示すエピソードを描いた上下二巻の絵巻です。正和3年(1314)に最初の絵巻が作られて以降、江戸時代に至るまで多くの絵巻が作られました。

本件は、京都嵯峨の清凉寺所蔵の融通念仏縁起を写した墨摺りの版本（享和版本）に彩色を加えるなどの加工をした作品です。享和元年(1801)の清凉寺釈迦如来像の江戸出開帳を契機として制作されました。全巻にわたって、質の良い顔料と金泥をふんだんに用いて、細かいところまでおごなりにせず、大変な手間をかけて精緻に描き出されています。

なお、本作に付属していた『融通念仏絵伝裏書』（現在は写しのみ残存）によると、享和版本及び本作の制作に、松平定信の命を受けた谷文晁が関与したと記されています。本作の完成度の高さから、彩色を谷文晁が行ったことが想定されますが、資料が少なく断定はできません。

京の文化財が、出開帳を契機として江戸にもたらされ、新たに作品を生み出し、それが近代の東京で見出だされ、所縁のある寺院に大切に伝えられたという点で、江戸東京の文化史において重要な作品です。



東京都指定 無形民俗文化財 (民俗技術)	みなみたま 南多摩のメカイ製作技術
	せいさくぎじゆつ
所在地	八王子市・多摩市
保存団体	八王子由木メカイの会 多摩めかいの会



メカイは、文字で表すと「目籠」と表記され、多摩地域の里山で自生する篠（＝アズマネザサ）の表皮を薄く剥がしたものを編み上げる六つ目の籠です。製作地の農家の間では農作業や家庭の炊事用など日常生活用具として重宝された他、都市部の商店や料亭に出荷・販売することを目的として製作されました。江戸時代から昭和前半まで、南多摩地域の多くの農家で作られ、農閑期の重要な収入源となっていました。

南多摩のメカイ製作技術が、他所の竹細工と異なる主な特徴は3つあります。一つには、メカイ包丁という特徴的な刃物を使用すること。二つには、芸術的な完成度は求められていなかったため、訓練すれば皆が作れたこと。三つには、材料の篠を乾燥させずに青いまま使うこと。半年ほど乾燥させた方が出来上がりは安定しますが、南多摩のメカイは主に正月の年賀用としての需要であり、青い方が好まれたためです。

高度経済成長期以前の人々の生活に欠かせなかった里山を維持するために、伐採する必要があった篠竹を再利用して製作されてきた、都民の生活文化の特色を示す民俗技術として貴重な文化財です。



東京都指定 天然記念物 (植物)	まいごじい 迷子椎	1本
所在地	三宅村坪田 6315 番地	
所有者	三宅村	
指定内容・ 数量	シイ 1本 樹高約 17.5メートル、幹周 8.5メートル	

迷子椎は、三宅島坪田の大路池北西部の、池に下る緩やかな傾斜地にある樹齢不明の古木です。

『三宅島史』（1982）によれば、島民は、噴火の起こる現象は神の怒りの姿であると信じて、これを御神火と敬称し、さらに噴火口を御穴、火山灰を御灰と呼んで祀って来たといわれています。本樹は、三宅島の噴火を司る神々が宿る神木であるといわれ、みだりに近づくことも禁じられ、「やどり木」と呼ばれ畏敬されました。また、かつて椎の実が島民の大切な食料の一部であるとともに、江戸に送り出す産物でもあったため、秋になると椎の実を拾う人々が密林に入り、時に方向を失って危険にさらされる事態も起こりました。その時に、この木を目標にすれば密林から抜けられる、「迷子椎」つまり迷子を助ける椎という意味で呼ばれ、島民の生活と深いかわりがありました。

迷子椎は、噴火とともに生きる三宅島の歴史を伝える伝承を持ち、人々の生活に深くかわり古くから親しまれてきた、由緒のある木です。また、主幹頂部が失われた後も、永い年月を経て主枝や萌芽枝の伸長等により形成された独特で複雑な樹形を持ち、東京都の自然を記念する名木として貴重な文化財です。





世界で最も美しい橋 清洲橋

1. 橋の展覧会

隅田川には多種多様な橋が架かることから「橋の展覧会」といわれています。しかし、昔からこのように様々な形の橋が、架かっていたわけではありません。隅田川初の鉄橋は、1887（明治20）年に架橋された吾妻橋。以後、明治時代に架けられた5橋は、いずれもトラス橋という構造でした。これは国内で製鉄が出来ない時代にあって、トラス橋は鉄の使用量を抑えられる安価な構造だったからです。今の様な橋のラインアップになったのは、1923（大正12）年に発災した関東大震災が契機でした。

同じ構造で架ければ、設計も楽で工期も短縮出来たかもしれません。しかもトラス橋に比べ、アーチ橋の永代橋や吊橋の清洲橋の工事費は約3倍と高額でした。しかし、そのような選択をしませんでした。

当時の日本は、橋梁技術で欧米諸国に大きく水を開けられていました。橋は数十を超える多くの構造形式があり、技術の取得には時間と経験を要しますが、国内の鉄橋やコンクリート数は少なく、技術者も技術力も育っていませんでした。しかし震災の復興で、短期間に450もの橋を架ける必要に迫られました。当時の役所や技術者達は、この機を橋梁技術アップの又とない機会と捉え、あえて様々な構造の橋を架けることにチャレンジしました。彼らの目論見通り、橋梁技術は大幅にアップし、一挙に橋梁先進国の仲間入りを果たしました。

2. 美と堅牢を備えた橋

このように誕生した隅田川の橋梁群の中で、織りなす曲線の美しさから「震災復興の華」と謳われたのが清洲橋です。2007（平成19）年には、国の重要文化



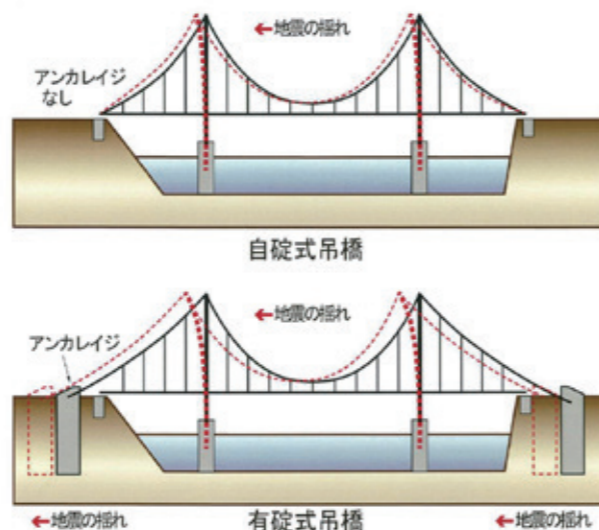
曲線が美しい清洲橋「震災復興の華」と謳われた



清洲橋のモデルになったケルン吊橋

財にも指定されています。清洲橋は、当時世界で最も美しいといわれた、ドイツのライン河に架かるケルン吊橋をモデルに設計されました。清洲橋に限らず、永代橋も言問橋もモデルはドイツにあります。これは、橋梁技術で当時世界最先端だったドイツに範をとったためです。ところがケルン吊橋は、第二次世界大戦で撤退するドイツ軍により破壊されてしまいました。ゆえに世界で最も美しい橋の面影、それを見られるのは、地球上で清洲橋だけなのです。

清洲橋の構造は、鋼鉄製の自碇式チェーン吊橋といえます。一般的な吊橋は、主塔の両側にアンカレイジという大きなコンクリートの塊を設置し、これにケーブルを定着します。このような吊橋を「有（他）碇式吊橋」と呼びます。一方、清洲橋にはアンカレイジが



地震時の自碇式吊橋と有碇式吊橋の地震時の挙動の違い
清洲橋のような自碇吊橋は、有碇式吊橋に比べて耐震性が高い。

無く、ケーブルを橋桁の端部に定着する「自碇式吊橋」という構造です。自碇式吊橋は、施工が困難で工事費も高いことから、国内の吊り橋のうち1%以下しかありません。このような珍しい構造の橋を架けた理由は、自碇式吊橋の耐震性の高さにありました。有碇式吊橋は、地震の揺れで、橋桁と左右のアンカレイジの3者が別々の動きをして落橋につながる恐れがあります。一方自碇式吊橋は、一体的な動きをするために地震には強いのです。

また清洲橋の吊材は、ケーブルではなく、アイバーと呼ばれる鋼材を、チェーン状に繋いだものが使用されました。チェーンは19世紀の吊橋に用いられた古い構造で、20世紀になるとケーブルが主流になっていました。しかしそれに反してチェーンを使用したのは、国内メーカーでは高規格のケーブルを生産出来なかったからです。もし戦争などで破損すると、国内の技術でなければ補修もままなりません。ゆえに頑なに国産技術にこだわったのです。

このチェーンは、橋桁を吊り下げるため、大きな引っ張り力がかかります。ここにデューコール鋼というマンガンの合金を用いました。橋への使用は世界で初めてでした。このように大きな引っ張り力が働く部位には、ニッケル合金を使用するのが世界の潮流でしたが、国内ではニッケルが産出しないため、産出するマンガンをういたのです。清洲橋のチェーンからは、戦時などの危機管理を、現代よりはるかに求められた時代が透けて見えます。

3. 清洲橋リボーン

橋を管理する東京都では、2009（平成21）年から、橋の寿命を今後100年以上延命する「橋梁の長寿命化」事業を推進しています。最新の設計基準に基づいて、古くなった橋全体をチェックし、適合しない部分については補強を行います。清洲橋もチェックしましたが、百年前の設計とは思えないほど、補強を必要とする箇所はわずかでした。特に驚いたのは、通行する車両と言えば馬車か荷車だった時代に、将来の自動車交通を予測して設計されていたことです。何と、現在の2倍の交通量にも耐えられる構造でした。耐震性は、終戦～1995（平成7）年に架けられた橋に比べると1.7倍の強度がありましたが、最新の基準からは劣っていたため、地震の揺れを吸収する制震ダンパーを橋台と橋げたの間に、片側8基ずつ設置しました。隅田川のテラスから橋げたの裏を覗き込むと見ることが出来ます。この長寿命化に合わせて、中央区側（下流側）の橋詰めに1本だけ保存されていた建設時の灯具を参考に、橋全ての灯具を建設時のデザインに復元しました。ただし、材質はアルミ、ライトはLEDと、耐久性やランニングコストを考慮した最新の技術を活用しました。また、2021（令和3）年に開催された東京オリンピックの開催に向けて、ライトアップもLEDを使用してリニューアル。日没から23時まで、昼とは違うもう一つの美しい姿を見せています。

今年に関東大震災から百年を迎えます。長寿命化工事を終えて生まれ変わった美しい清洲橋を見に、ぜひ多くの人に脚を運んで頂ければと思います。

（文：紅林 章央）



清洲橋のチェーン架設状況



清洲橋に設置された制震ダンパー



左 中央区側（下流側）橋詰めに保存された建設時の橋灯
右 復元された橋灯



ライトアップされた清洲橋（撮影：熊谷 健太郎）

住所：中央区中洲～江東区清澄
最寄り駅：水天宮前駅（メトロ半蔵門線）から500m
清澄白河駅（メトロ半蔵門線・都営大江戸線）から700m

文化財を活かす(練馬区)

東京都指定文化財(名勝及び史跡)

牧野記念庭園(牧野富太郎宅跡)

庭園の由来

牧野記念庭園は植物学者牧野富太郎(1862-1957)が大正15年(1926)から昭和32年(1957)に逝去するまで居住、研究の場としたところだ。

牧野博士の逝去後ほどなく、居宅や当時敷地内にあった標品館とともに土地が東京都へ譲渡され、公園としての整備が進められました。その後、翌33年(1958)10月には都から練馬区に土地と管理が移管され、12月に「練馬区立牧野記念庭園」として開園しました。

現在も庭園には、牧野博士により植栽されたスエコザサ、サクラ「仙台屋」、ヘラノキなど牧野博士に所縁のある植物が多く残されており、一部保存された書齋とともに牧野博士の研究活動を窺い知る重要な遺構となっています。令和2年(2020)3月には東京都の名勝及び史跡に指定されました。

保存事業

開園から60年以上が経過し、樹木の高木化や大径木化が進行し、競合や被圧、衰退が発生するなど、博士所縁の植物の数は年々減少しており、植生の保全は重大な課題となっています。

そのため、東京都の文化財指定前の平成31年(2019)4月、練馬区では、本園の植生を将来に渡り健全な状態に保全することを目的として、「牧野記念庭園植生管理計画」を策定しました。

令和3年度は植生管理計画に基づき、腐朽の進行したイヌザクラおよびサイカチについてケーブリングによる支持補強策を実施した他、庭園の入り口にまたがるカンザクラ「大寒桜」の傾斜に動きが出たため、急遽頹杖支



▲カンザクラ「大寒桜」支柱設置状況

柱の設置を実施するなど、樹木の保全を図り、来園者および施設の安全対策を実施しています。今後も日々変化する環境の中で、この貴重な庭園の植生を将来に渡り継承すべく管理を進めていきます。

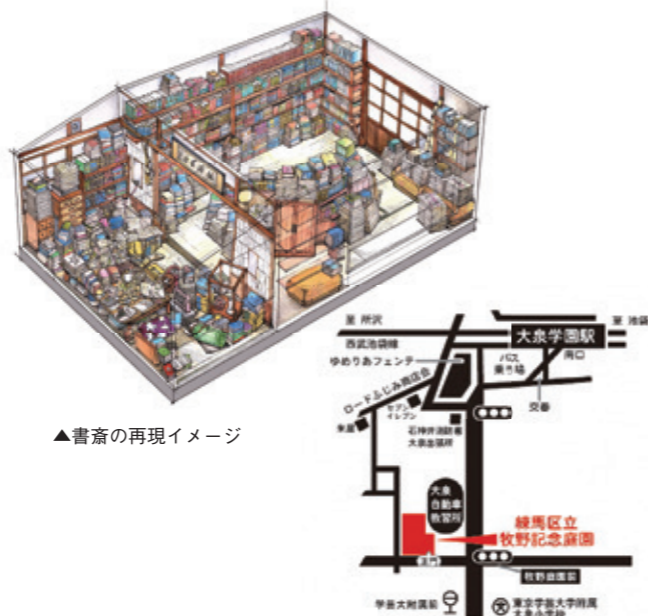
活用事業

現在、博士存命時の書齋の様子を再現するプロジェクトを進めています。

園内には、博士の書齋と書庫の一部が保存されています。博士は晩年、庭で植物の観察を行い、書齋で著書の執筆や植物の描画などに勤み、机の上には愛用する道具や原稿が所狭しと置かれていました。また書庫には4万5千冊にも及ぶ蔵書が足の踏み場もないほど積み上げられていましたが、博士の没後高知県立牧野植物園に寄贈され、現在は整然とした状況になっています。当時の様子を再現し、博士の植物への探求心と愛情を伝えられるよう取り組んでいます。

当プロジェクトは、「練馬みどりの葉っぱい基金」の寄付金を募って実施しています(現在募集は終了)。

令和5年4月3日の公開予定です。お楽しみに!



▲書齋の再現イメージ

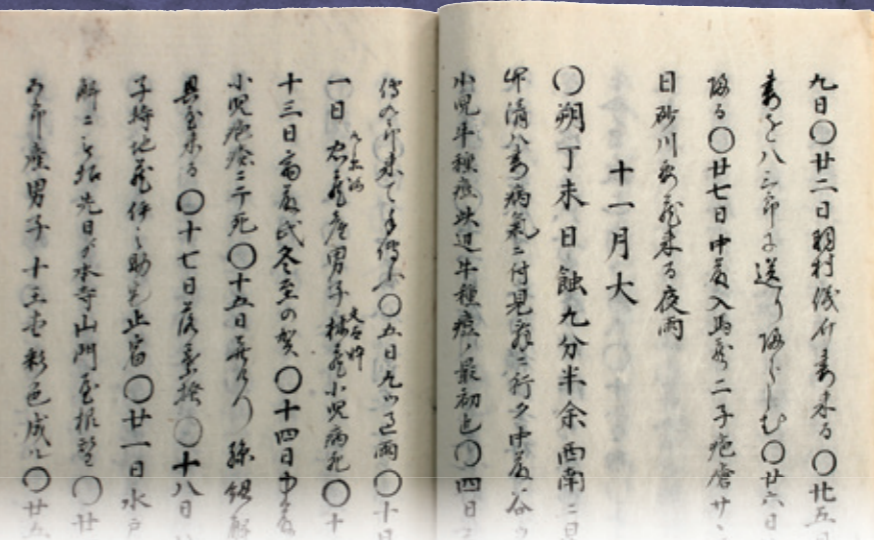
牧野記念庭園(牧野富太郎宅跡)

所在地: 練馬区東大泉6-34-4
開場時間: 9:00~17:00(休園: 火曜・年末年始)
連絡先: ☎03-6904-6403
アクセス: 西武池袋線「大泉学園」駅南口徒歩5分、西武バス吉61系統・泉35系統、関東バス西03「芸芸大附属前」徒歩3分

文化財を活かす(武蔵村山市)

武蔵村山市有形文化財

「指田日記」



武蔵村山市有形文化財「指田日記」

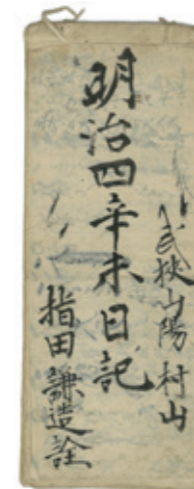
指田日記は中藤村原山(現・武蔵村山市中央)の陰陽師・神職として活躍していた指田藤詮(号・摂津介、摂津正)が天保5年(1834)から明治4年(1971)までの約38年間に渡り記録したもので、市域の村社会を知る極めて貴重な史料です。

昭和51年(1976)4月に市有形文化財として指定し、その後発見された「明治四年辛未日記」を平成15年(2003)6月に追加指定しました。

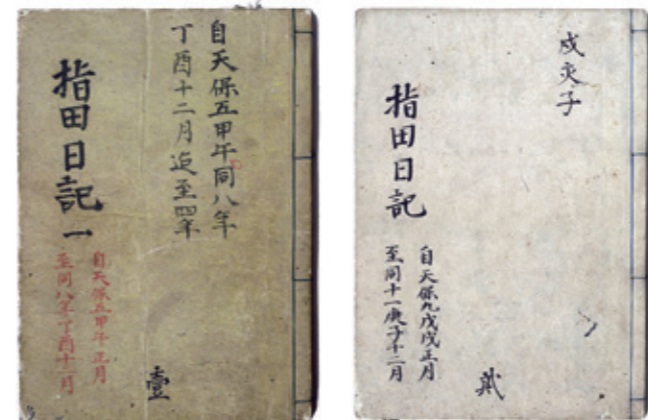
陰陽師「指田摂津正藤詮」の活躍と天然痘

指田日記の内容は、親せきや知己との交流から近隣縁者の婚姻・離婚・出産・病・死去・法事のこと、そのほか事件・盗難・旅・風習・祭礼・行事・教育・学問・天候・天災・政情など、地域共同体の一員として捉えた出来事を綴った日記です。なかでも疱瘡(天然痘)・麻疹・痢病(赤痢)・風邪・コレラといった疫病に対し、呪術的・信仰的療法(民間療法)を行った記録が多く見受けられます。

医療技術が発達・普及していない当時、人々は病気を引き起こす存在を人格化し、就業者による治療の一環として疫神を追い払う「神送り」や病気平癒を願う加持祈祷が行われていました。日記に記録された天然痘の呪術的療法には、疱瘡神が忌み嫌うといわれる赤い幣束を備えた棧俵を使った「疱瘡棚」への祈祷、病児の身体へ酒と湯



「明治四年辛未日記」



「指田日記」

を合わせたものを流して身を清める「湯流し(湯かけ)」や「ささ湯(酒湯)」が行われ、回復後には神送りとして疱瘡棚を燃やすか川へ流したといいます。また信仰的療法として、個人または集団で観音経や般若心経を誦読して病気平癒を祈願し、さらに篤く祈るために禊の儀式「千垢離(水垢離)」を行い、近く寺院へ「千度参り」をするといった対処法がありました。

種痘の記録

藤詮は中藤村の漢方医である齋藤寛卿から医学を始めとする諸学問を学んでいた影響から、日記には近隣の医師との交流や西洋医学を用いた医療に関するものもあり、先駆的に天然痘の予防接種いわゆる「種痘」が行われていた記録もあります。

天保9年(1838)3月24日の条には、寛政2年(1790)に緒方春朔(筑前秋月藩医)が成功させ日本全国に普及した人痘種痘法を受けた病児のこと、嘉永5年(1852)11月1日の条には、エドワード・ジェンナー(イギリス人外科医)が開発して嘉永2年(1849)に日本へ伝来した牛痘種痘法が初めて村内で行われたこと、また日記には藤詮の息子で後に医師となる指田鴻斎が文久元年(1861)より積極的に牛痘種痘法を行う様子も記録されています。

こうした中藤村や近隣の医療に対する意識の向上に寄与した藤詮が残した日記は地域医療史のほか各分野の研究にも活用されています。



注射器

武蔵村山市立歴史民俗資料館

所在地: 〒208-0004 武蔵村山市本町5-21-1
開場時間: 午前9時から午後5時まで
アクセス: JR中央線立川駅より立川バス箱根ヶ崎駅東口行きまたは三ツ藤住宅行き「横田」バス停下車徒歩10分
多摩モノレール上北台駅より市内循環バスMMシャトル「村山温泉かたくりの湯」バス停下車徒歩1分
JR八高線箱根ヶ崎駅より立川バス立川駅北口行き「横田」バス停下車徒歩10分